

222 日本とフランスの雄鶏（2023 年 12 月 21 日）

前は、日本とフランスで、建物の装飾の中に登場する猿をご紹介します。今回は、猿とは別に、人間に身近な生き物である鶏を取り上げます。

パリでは生きた鶏は見かけませんが、フランスで鶏のシンボルマークをよく目にします。サッカーやラグビーのフランス代表のユニホームには、フランスのシンボルである「ガリアの雄鶏」がデザインされています。また、パリのノートルダム大聖堂の尖塔の先端には、ブロンズの雄鶏が置かれていたのをご存じでしょうか？（写真右）。2019 年 4 月 15 日の火災で尖塔が崩れ落ちましたが、この雄鶏は奇跡的に救出され、修復されました（写真右。2024 年 6 月 2 日まで、パリにある建築遺産博物館で展示中。）。美術館には、鶏が描かれた絵画作品もあります。



日本人にとっても身近な鶏は、古くから美術工芸品の中に描かれてきました。以前にご紹介した[マリー＝アントワネットの漆器コレクション](#)には、雄鶏の形をした入れ物があります。また、シャンティイのコンデ美術館には、17 世紀後半に伝えられた漆器の櫃（ひつ）があり、蒔絵（漆器の表面に漆で絵や文様又は文字を描き、漆が乾かないうちに金や銀といった金属粉を蒔いて表面に定着させる技法）で雄鶏が表現されています（写真右）。これらの工芸品がフランスに伝わった 17 世紀や 18 世紀は、また日本とフランスとの間には交流がありませんでしたが、フランスの王侯貴族は日本の雄鶏を見ていたことになります。



時代が下って 19 世紀後半のジャポニズムのブームになると、日本の浮世絵や意匠が、フランスの芸術家に様々なインスピレーションを与えました。その一つ

が、葛飾北斎による「[北斎漫画](#)」です。絵の手本帳であった北斎漫画には、動植物も描かれています。ガラス工芸家で陶磁器専門の美術商でもあったフランソワ=ウジェーヌ・ルソー(1827-1890)が、版画家で画家のフェリックス・ブラックモン(1833-1914)に作らせた食器セット「セルヴィス・ルソー」の中で、ブラックモンは、北斎漫画の雄鶏をモチーフとした皿を制作しました。

雄鶏の絵と言え、もう一人ご紹介したい画家がいます。それは、伊藤若冲(1716-1800)です。右の絵は、若冲が1761-1765年にかけて作成した「動植綵絵」(どうしょくさいえ)のうちの「群鶏図」です。「動植綵絵」は、30幅から成る動植物を描いた彩色画で、現在は宮内庁の三の丸尚蔵館が所蔵し、国宝に指定されています。「群鶏図」には、色鮮やかな十三羽の雄鶏が緻密な筆使いで描かれています。若冲は、自分で飼っていた鶏を毎日観察して、作品を描いたと言います。日本でもなかなか本物を目にする機会はありませんが、展示されるときは大きな話題となります。



実は、フランスでも「動植綵絵」が公開されたことがあります。2018年に日仏友好160周年を記念して行われた「ジャポニスム2018」の際に、パリ市立プチ・パレ美術館において「動植綵絵」を展示した若冲の展覧会が開催されました。国宝であるこの作品が海を渡ることは珍しく、ヨーロッパでは初公開でした。この展覧会は大変好評で、フランスに若冲ファンを生むきっかけとなりました。このように見てみると、雄鶏が日仏交流に貢献していることが分かります。